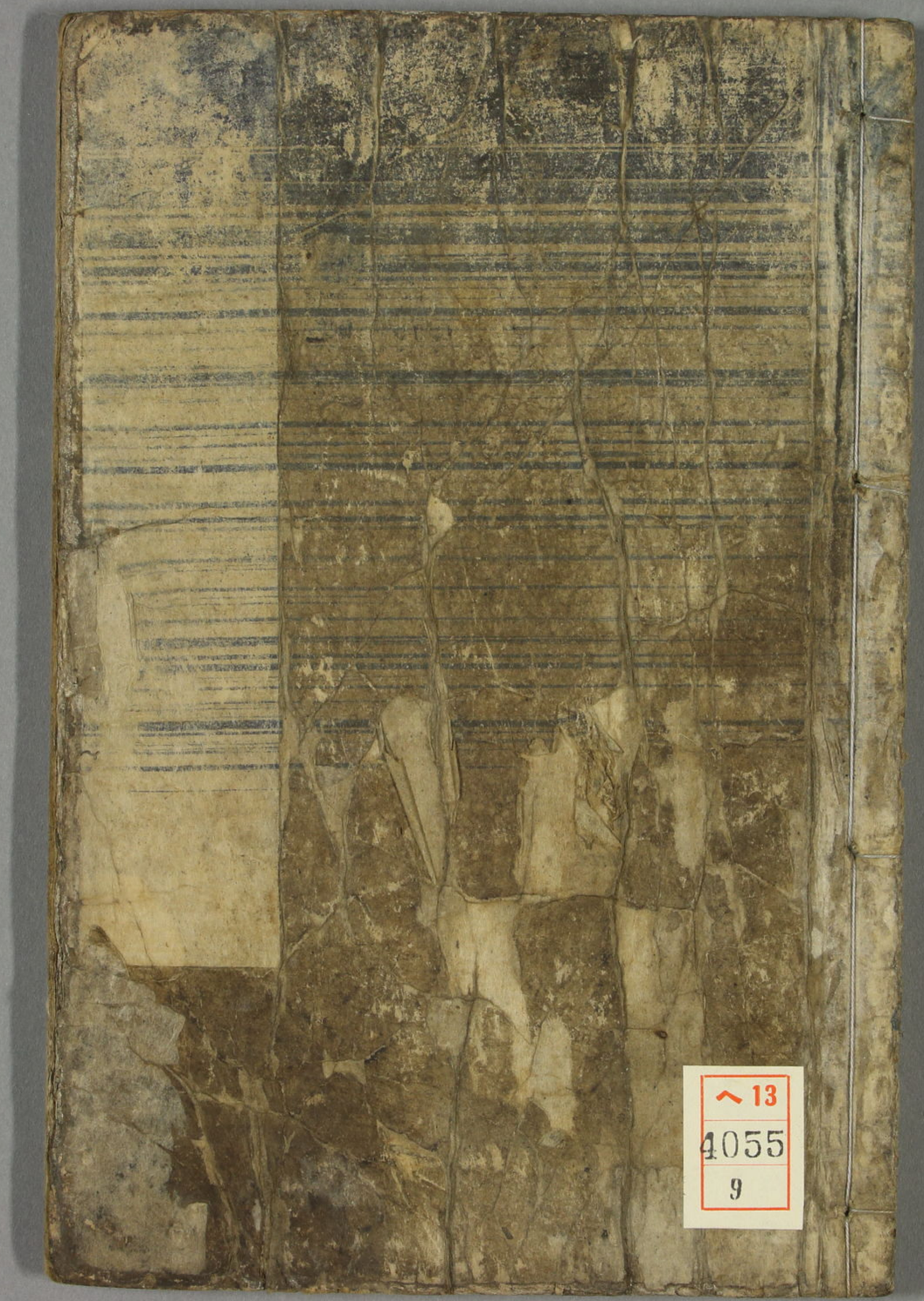

へ13
4055
9

門 ヘ13
號 4055
卷 9

歟討東繪綿實記

武蔵長郎兵衛尉主

公益機関

京都帝國大學圖書

仇討天貞東綿實記巻之拾七

目録

一 倉光小次郎改名泗川指南の事
雷治郎小次郎宅へ来る事

大正十年八月廿七日寄贈
本大學出版部

仇討天貞東錦絵寛記巻之拾七

倉光小次郎改名御術指南の事

并

雷治郎小次郎ゟ宅へ来る事

扨倉光小次郎ハ伯父服部小右衛門

仕立屋善兵衛ゟ三人同屋敷にて安堵

一ツ木町へ打ちつまきれバ伯父八左衛

中にも汝(なんぢ)田舎者(ゐなかもの)といひ江戸(えど)へ来(きた)りて
の不埒(ふらち)言語(ごんご)同然(どうぜん)なれどもまづ
此度(このたび)ハ用捨(ようしや)いたし是(これ)より前非(ぜんぴ)を
あらためよとおのれ大せつにいたし
かく吾(わが)夫婦(ふうふ)の前の中(しゆう)事をも
してそむく事なくかれの者を遣
しき万事(ばんじ)修(しう)業(そ)専みにして役(えん)儀(やく)を
第(だい)一として家(か)の繁(さ)昌(はん)をすべし幾(だい)代

もつて今日を送(おく)るべししかしなが
らなんじいまだ江戸(えど)不案内(ふあんない)の事
諸(こく)事(ぞうじ)ハ心(えんてい)得(じき)ハつくまじ
召遣バそれまでハ諸(しよ)事(じ)の入用(にうよう)若干
うしなひてよりかへりみるねふそくの
あるハ是非(ぜひ)をわきまへバこゝろざしより
勤(つと)むべしこのうへかしこ(せこ)しの不(ぶ)
埒(らち)の事あらバ親類(しんるい)の縁(えん)をきる

なりまゝに人間はあるべくれく
ぶしと義経みいくんをとゝく
ちや用も多陽あれとぶるれば
見れらハ少いとゝ多中べーもと一ア
少次帝が事を紙ノ毎のミ敵る色
ば少る裏ハ同紙あるぶんして海
見ると八ちゝ歩つハ小のとは
きやゝとさゝりるなと

少て昔義経ハ少次帝ゆもひさて
ゝ管町ゆての山不地戸山不ぶん
るひとハいひるぶら山清き合の人
ゆ一ゆれば山の事ハ中るぶら
義事伯父極の山世ゝなれば
山清ゝこゝそ書る要るもそ
中てゝへらぬ事ゆまバぜひふし
只今よりハ伯父様のあるせの

まをり四郎兵衛の事をきうちい
四郎の法くしこ如んとゆりこの
ちご八ちまつさんの内れつせいをと
れるく大せろ四ーせ
西じまさるる苦をゆがーこそでみ出産帯
さ如んしんしまをゆがまでの
ゆらちゆりまり入へくりけうく
第事おたくしこかんぐんをさし

づみまつせおそのゆりたきゆる
まで時分のうーをゆる鳥居ぜん
ゆ少せと報入とくゆ毎こみ毛れかし
たのこれば苦をゆりもれをよ
しかくるまをくくのゆる鳥世の
報こふいひうぐ山報文みゆるのこ
くふゆみ事でせひをきう形世の
ゆうをきゆやく大みゆれとせう

ゞさてあの色がまことありうる
て傳奇をしつらひあきさう
りれバまづ前名ハ山次郎
て多紀その名ハ山次郎
ハれそのうちゑハの吉事
の事ハ文帰山次郎
ゝ山次郎の瀧
ゝ山次郎又傳りへ
うつらせられバ

山次郎ハ西光のさうごう
ゝまでの先祖をくわしてのて
たくさんもつきられバ万事義経
へお供して平人日ハ五しるが山次
郎ハ日の当たるさびしい所の
悪事さいの世の中ハとゞせ
あのひたゞくさうどやうせられバ
せめての事をみづから改名して

服部平馬と号し一刀流の師匠
その外やうく乱切木の指南の看板
をかしそのうへ自分手柄なる
れば手のうひるとてとふんと言葉
へぐんじ給れば如何もうろたび
世ようなれば行事もなさう
なしぬるとこれ世の指り
ものなりと此一云のものこと
以前のはなきまでとまらぬうして
なりはうづは吉を出せとをつて
手負るも十人ばかりみたび強交
服部東郷の指南せしもの
のうちきものの我
うちうちん人あり
うちんとうづう一吉月中みつん飛
大指みなりてい
の神みなのもき
なれば吉を出ば悦び

大うさるゝ伯父八右衛門方へ行て
ゆひてゝしはれば伯父も喜悦の
まゝとひらきもてなしの世色
ありと行く礼みぞあるべく
ゝるは一つ町とつゝあいの内へ
國前後まで八一めんの田畑ありして
面性富ゆゝ大家ぞ
ばくゝりしあり元和年間ぜん

くゝん業の地とゝなり関曲橋外
曲輪沙ゝん町東西四町江戸
み登地町て四面地ゆゝりその上
流長吉丈のゝゝ洋服しゝ
屋敷あも地理ゝうて別住け
町ゝ義の部ゝゝりゝ
物ゝゝ永四年ゝ西の田町
ゝ名ばけ一里塚のゝゝ

榎の木のりなるをもつて一ツ木村と
いひならはし又むかし前九年
後三年のたゝかひに勇列伝説あり
牧義義家結守府の将軍たり
時は石田陳少尾を主て勇列
往来の人を往来なりしゆへ
人はぎもふくいひたるより村名
とれをいひならはしは石田山谷多き
場なるゆへ山神多く住
で往来の人をとるやまもしかも
いわゆる町家の立はきて一ツ木
町とよび少人なれ必ずも出城下を
さる事なれどもなり是は茅屋
もまじる人情いとましくなる
なりさてもこゝろふ慶元の礼儀
後五十年百年みなこゝろざる

田へ水や田民ともみ人情のつく
男ばかりでなく女のなかり郡鄙一
望み是をわりてとし町人百姓
とゝくどもはたもかきざしを
常しかつきるべく小次郎平
るゝ改名し弥郎兵衛の者
板名せし田へ若きものどもい是さ
ゝるもとつまもかつゝるもし

世ゝ人情はたるべしそのゝ
情変をわりて行くゝ養ゝと
ゝ事もあきものゝ多し
なるもいて行きものゝ
多くてたしかる中ゝ雷治郎
ゝいものありは是いかと常外
水戸藩のものゝ多るが左部ゝ
ても情変ゝ思ゝとし堂尾口湯

み母をくどくし人の妻あるかどうか
し陰ゆいその悪名世間へ聞へ
みやゆるゆるゆひられば吉親い
もちろん一家のものつまり一家
一もんい業絶し杉やの娘をうけ
主の恵ありきまうみ水戸領を出
奉し江戸へ出て仲間をたして
二三年ばかりまうけまうりる

ぶいくぐちろんぐくろうきみ捨てとの
吉伝家吉坂谷といつもの小家を
もりて物乗を渡世としてたてこる
ぶかぎりもるき悪事をとどさと
人の娘をかどどかし宿くの間
如みうりばるひいとりにげ名前
人を家言みかくしあき或い登録
岩付主殺し人ぐ行しものせん

ぎこれある節はその節くとまつて
是をそらへおしまきゆれば是
ぎありてもかくしをきさうを変
ゆりてそのたのづが徒分をかんぶへ
是非ともきまへぎるの雷人あり
けるへ書如のかみあるどかこひ
をきぼうへいはるるみかちひはるる
こと人のあるみをとしきもの

をかくへたきるるさうし居りる
るへみ人は沿岸をおそうる事
鬼神のごとく行事もかれかいひ
おせ事をばそのまゝみてをき
りるるへみたのづかのあのをと言る
恨して男ごてみをとしく手下の
ものはまへありてこづらく人中
の龍ありしく祝して居りるこうる

平馬が一ツ木町みなみなて浦御
看板をうつてあらはしやあるひ
けん法みなみ部ちうくかぜん坊谷
みあるうへ一部いふ知る人みなより
みあるうへ屋きみさまるそのうへ
部屋へ小看の一足みなの酒の食も
持参してやつくの看板をあ
りとものとりいの所ひきたるる

みその一云のいさうる行うそう
ぐしく書たてゝうぐぶかれめ
みあるとうせ看板をこうぜんのと
あるひしかりかゝ者面の法者小六
の宮といまつる神大国主の命
みして水川大阪神と称しまる
毎年六月十又日参れるれば
人数集して法りものをあ

門〳〵てうちん花籠とかし蒔
極暑の節なれば土てごミなりぐ
夕方ゟうりこえ者の男女あびしぐ
〳〵されバこの雷治兵衛も手下
のあるれりの中ゟ人を引つれ
土てごミるぐゝみ立ちひぞ
うきさいとひゝりと平馬が方ゟ
沙汰でやさて鶴言る八兵衛土庵の極七
狼藉三国正宗九郎兵衛天の天七郎るど沙汰
のものどもとそもるひ平馬が門ゟ
立かゝりて西師匠いやぐうやと立ろ
く立入りるみあるしの家のすの
人六人居こりるぶ雷治兵衛とそ
大みわどろきこゝ〳〵働へ出げ
入りるみ平馬ハ立ソで是ハどるぐ
とぞんぜねどゝしのとそれ中ゟぶ

福まづく是へ出かけり出へとの所
さつしられば出りんがきるべし
と座敷へ出かけりよき座敷に成つとる
をりこるのものも出所へ出こる
人のこゝろ是くらけり出へとりしか
ゝ手下のものどもくとけるる
をこるゝこれ一こせばけりかの
ものどもをりこの酒屋が新色

をこるゝいろくしてせいこく
ゝりこげ目の下より生てかへるの
似りそんぜ仁王のごく大酒の
ものとへとものをこゝ出けりの
こきざしをさしもあの所り
座しれが平高八法度をもひて
座しこれふそどあて出知る人と
おゝ少来出見知りけりしら

ほれて幸いは袁盎の浪人の服装
平言とやのうりたるものの芝居
のうち未熟のわざをかたりめし
もそぢ入ゆとゝんぎんみやこ名義
いせうらぶひゝや西師匠のあるか
さうゝや永ぎもらぐるのものた
ぬ者るみうりたゝして日比新ひ
やみより今ハうぎゝくうれる成

まるひ推糸やゆるり兼て取り
ゝゝるぐうゝ白ぎゝゝも薄元いく
ゝたくゝもぐうゝのものの
ぐゝ内指動なるとれゝけきき
うのゝのうきうゝれども平言ハ
くゝてきゝ友ゝ雷名義ぐ幸る
れがよきみゝうらひかうゝんの
とゝ是ゝくぐみゝもゝね

れてせうるこれらぶでさのもの
ゆ指南とハれそれ入くるの事
ともまづ〳〵ものゝ体足の
てゆめくりゆへと約束返言
しるれば中も能毒の八ふ
大夢ゆげゝや先生とぶけめさ
るるこれ〳〵今の乗ることゆもぎ
ともこんゆ〳〵海月けんやう

なるゆ撰古不ゆ為しるさる事
業もぞんせずこれらハ格別
親分の方へハちよるゆ為れ
ゆてもさのゆ和ゆもなるまで
そうして安板ハあるゆ江戸八百
八町ゆ中の人せをとるある
ハ海産を指乗してわやぶんの
むとの一云ハ法なるにそれに

ぞうんぞや鼻のさきへ瓶をおし
ふせてそのまゝでさしてゐるくれやう
がんぞうじめ見れば下までぬきつけ
ゐたるとしよりのものゝ云へいぶか
せるとして申すこゝろやそのゝ居
るけんぞくぬきいるものの
ぞうりのくいを圓の新ぶれ
ばきもけうぞーぜひもけおいれや
ぶんぞうじめ見まてぐりこう
やうみまゝのさうれよりとうてきくり
してゝひれば行うゝ家色やなり
けんと平馬はすくねんさして
きて居りしがゝ
うりつりー事ゆえ
ゆえ金銀ゆのつけ
限人ぞいてこせ

なりそのものの天下のゆもぐさもとへ
備宅いくさの所家の流へ届け
いくさしたるとしの事をきゝもぐてま
しては法度のごく高きいくさぐ
不肖なるぐも武備の指南いくさ
ものゝ所為へそぐけとはいとて遠
そぐんぐはたくしまぐ者所新
者のとくくしなれば心そぐね

ぐちゆみ少へばその面はゆんけれと
さくしも厚せぬ所りさるゆみ熊書
はえぐへなげ武士の武備のとゝ
めさるぐそのようるもぐくさ
事はとれくはゆぞんぐるもく
らはゆ自ぎと澤尼と立て
云二云三みもしやぶり紙を平るは
高ぐそんとくのていまてゆやまぐ

四位なりたれと云へとも五へ位なる
作てかの道さんさんるやつうる
こゝをもつてだ身しらせばかへ
づもなきわが命うるとこぶしをあつ
て無意ぶさをとゝ（ばかへるくも
ものゝしとうつてどうさりとた
をるくまるくのとりのにへいや
そのまゝみたくべきやゝでひとつう
ゝと一度みどうとびかうをさし
つうりと平るぶ早ぶ右と一度
みたうゝるげむうてかゝうをつうゝ
ひし此人をかてみ花そのごく
ゝもかうり（うせつけねばせう
じ姫ゝもこれそづれ大きるそう
どうみたよびればこのものあとみ
きんどよ
金のものでも堂花のかうと所へ

そるのくうちよりそるあみ平馬ぐ
をくらさぐんじんをのぶまさ
うち古人をひざをみ引きしき出り
四人一度みそふへてうで祝じの
げーそのうちさるをさきじ
かりうる刀脇をかくりかくるさるぎ
のそのゆをみ番沢をかいをのく
と大ぐらしてゑんぐわしぐり

しぐ平馬ぐ目ぎこふみ大みたどろ
きはすのくあそぐそのうへ大力
をうこくこれらがおよぐあるて
なしとひざを立てて平馬月
むひあをくゆ師匠みふれどろ
きこ入こうゆ乱淵ゑ下のものも
今日のぐそうほうこれをんぐ
てゆうさせゆへ古れかふかまを

学問の門弟となり、藝術をげ
まし、べーとことぶれを平馬を
遠慮なくどつしてくまんとなり
ゆくゆくは門人のものいふくと
るをぐるぐるまわる師匠さまのや
まりまくしめんくいふぐり
かるるをへ仕方や器量はかけ茶り
平馬ぐのぎるものうれしきみ居合

ゆもひてさてそこもいかと
なげかく人が来るともゆとり
なきれひでゆ同居といふ如はと
平馬さまのかんかんしてゆり
るきれまくせらることして
ヨビるるゆで平馬もかれらが意彼
ゆるとてゆでくふかへども仕官の
望ゆるるれバまいなくも

いうまのいしゐをとりてむもたらんに
ちからしかれらごとくさい出羽ぜん
何十人行れバとてとうでとゆしし
膝をとりさてくちるのくい所家宿
なり是ハ此所情もあるるらんに
所ら建ゆいかぎりもなるまでと
かくことうみるげさてあれバ此人を
大きゑみ面目なくいかきらなりしみ

ちそくくいつの君みやゝ一さんみそ
かゝ者作ゆゝるゆとゆのこりし雷後
平馬ぶ海事の手ぎをみれそれ
たちをうしなひるひ山ぶけ遠ぶ
へしい自性もいんと高海り
うるづきいやゆみ御道そで
りて紙りて大きる高邪めさる
て白旬ゝ所れいゆ紙ぶんられ

うさへも出ぬれと何うめいてりの
こゝろぢやくゝづくるなくく
ゐで出さ乃利

仇討天貞東海繪賓記巻之拾七終

仇討天貞東海繪賓記巻之拾八

目録

一 坂上四郎吉吏改名の事
并 拾女澄觸の事
一 田村屋四郎兵衛日本堤みて
雲龍の事

仇討天貞東錦絵賞記巻之拾八

坂上正雄吉吏改名の事

并遊女澄鶴の事

吉吏ハ坂上正雄吉吏ハ去る正月より
浅草三軒屋田村金幸助が宮ゐつて
主従うち連同所観音をたづめて

南部迎飛川八幡宮高源寺と人somewhat
きゝおよぶくらい小次郎を尋ぬるに
いとぎもそをとあるに人もなくむか
しく月日を送りけるある時八郎
みもとの中にはいれ故今をあてうす
もてやこゝ年もなりはれやうも
故のありかもあれはなくしてなんん
夜かぎりなれいとまぐ御座る

不人借宅してそのあと人と見せて
少高ひみてもそこあ一日かどりみなづ
ねでやとおもふのごとくして
なぐくある時ふ人のうるびもかくら
んものでもるしや百一日江戸
あでゝゝ事小次郎方へ少へるをいづ
くくそしらんもしれぬなるにも
せよ借宅とてと度後どなる

世幸助みかくと昔ハ遠ハ幸助きひて
いろもよきみ了貧なれども豆腐
みそうまでも切りてさしてふ富
はちびき人もなくたゞ沼みくりてハ
金蒲のものまで家うちのものと
事をとぐる人もしるれどかくして
少ハ切りて御ゑべしかくへ少非
うたりみれひてハ朝夕のみやさまで
かをつてハんばうひまをべーと義理
みやまをでハ八兵衛をゆてわのせみハ
べども之まで内くしてなるまま
御へ少ゆうつりゆもわるゞ義みて
朝夕の事ハ初者ハ内のみハ一先
主人とものみ之をうをハ傍宅
一山高ひ知そゞ世有のをうをを
もくとうかゞひ主人をとう私まで

江戸功者にも旅ならばかくぞう小紫
をたづねるにも手がかりよかるべし
と申すぞ四郎左衛門一しん
借宅して由ありし小紫をとぶらん
と花川戸といふ所に小さき家の内
りなりしに表うつり見世には筆墨紙
の類草履こまものゝたぐひをとりならべ
べいつまでも商てもそんぜざるものをと

去ながら商ひは渡世と身世上のいひ
をけなれば商売にも出精もせざりし
て名も四郎左衛門はあまりことごとく
しとて田村屋四郎左衛門と改名して
一日がはりに江戸中をいふ(?)しまして
ゆるときは心中同居してあいでかなるが
せけんへは兄弟なりといひふらし
はなみ八藤(?)いうて実躰のこと(ゑ)

ゆへ四位の命を南丹仕つる事壮年のものの
多くはめづらしく浦さら男ばきき
きれいみいるるみまれるるまれるる
ゆへ[illegible]のそのまで男ぜるひとをのを
れこ[illegible]ばかりるる既に天和
三年癸六月のこるみ四位の命を南
ハ日ごろの家ゆきてあるを
ゆきてまぐこぶの道遥しるを

たるるぶ八義を人ものるきものの宿に
ゆりてさぐ[illegible]浦然るるべし
[illegible]のそるく家みかり八郎みの
中にるふ日れるるひつきるる事
ゆりこまでまで[illegible]るみ台系を
じゆんゆるくの程ゆへ入ものども一夜
も山福しるる事るる程女をなげ
てゆそびるる事も神おし

なのひとつ事の道ばたにたちよるべき
を問尾しうらくのそびみ沼べ
しかるべくこの道といふ事はなく
さびたる景色ありといひてまげ
音羽へ入りて石細をうめびそれ
よりそしぐの坂にかかりて一夜二夜
ばく逗留しかまぐ沼をたづね
こんまきそのうへくもれざる事

あらばまきくこれ沼もなべし
一つ水ふかくきのめくをたづね二つ
ゆふ八幡ぶ日沼の野事をさんぜん
ことよりより八幡を問尾し花川
戸よりわどちうきさ事これば尾
より砂利場へ出お八町堤あめくり
玉井音羽井いくり雷のわどい二廓
中を道遥しこの日井沼日本冨解

ぶらい
ハ来の大平ものがたり説話
みれば、すべて昔ものの人物の形人物
老若うち交て歌をかざりし
猿丸ハ河房漢宮ハいざしらず、けん
せん白梅子とし、この日本武尊
まりしうちかゝる時帝ハ前代
ソまぶ、少ざるゝ時みして始まき文
ごもみ書つゝへ、さる事なれば

四帝書ハれのもの、かんみ、さく、る
八条みもろ、糸付桂里の姫より
とりたるやけんせん桂女ハ人の
桂びとのありとゝ、どもいやしうぞ
なきものの、もの、かゝる花の姫の
ちん業をまの河ゝり見桂ーを
ゝ業へとりゝ、るも一かゝるの
ぞ因縁るべしゝ感情あるのてみ

ひろられぬれば八重もかさなるごとくこの
みぎやうなるみめうでまさるわらせの
そうり菊丸のさうんるる事さいく
のとみて おぢられやうしるべ
ひきりある金子をもつて渡りなき
たのしみあるくらべ人こ彩の
害を引おこす事みるりは私事は
幼少より四家ゑそぎちの毎年
ひりて百事とちらばけけはせられ
もどめはいくるるにけ事や自
く四とるしうけりるるとり
中みぞ四市三佐これを学てまさる
そのりうが中毎りさてけ怪女の
れたりは廊ゑれば寄ゑ
放埒放蕩ゑおちいるものもきる
性へてとるし性きべき事ゑは

あらばよきかたりかうあれば彩色
〜のうの〜とそこのしきてし
そも〜けけんせひ和歌とそしあい
〜〜りてもさきき事ゆて書ゆも
あうとし先哲はれと稱したゆ
まづそのけんせひとしふのあとりい
和漢ともみいり〜〜りたるさ〜来
りてまづ庵去ゆい妓といひ娼婦と

稱せ漢の武帝中元年花蕚を作れ
はしてる欣長の安の緑陽と云る
名ぐうきあり又日本ゆ
毛羽院の御宇
後拾遺集ゆ
津の國の雜波の事も稱そ
稱びるとれるまとと社きけ

とかりまき源氏のものがたりみむら
さき式部が冥尾の巻み書れをく
こるみ源氏頂戴よりめしよ
時沼の姫女みこへ奏しし事を
ちうせりされば後一条院のちうせで
み此姫女かり第紫集もも姫
の婦女とかりち孝謙帝の御年
みもありしとるのん与羽院兼久

三年洛陽み落の千家和年の前
さしこ二人の婦さるんみるりこの
んで第を能氏姫女のまひこれり
そじまると年代慶記ちうせり
前方年記み慶京の四絶ぐ妾松代か
事をちうせり源年盛衰記み通憲
入道が妻磯の孫師ぐ水干
ちうかるどそきまひと男まひと

称して其古刀をきて いそうくとて
名ばしていうんぐりまてまひる
所の是を白拍子とせよ〳〵
し是拍女白拍子のそこめとるん
西行撰集国光伝記あり平相国
の妓王妓女仏御前祇園公の湯や
藤倉千寿義経の静巻時の傾城
の名ぐひ少野のお通朱雀の桂木

ちまいの白拍子の風ふて
大臣公は名将雪士のあそびの
ふりてゆくうんぐりとこめ
ぐうちまこ夜も初更をはぐる汐みな
りれば いぐやそ雪ハ多年の
うつりをそうさんと八幡とも
なる 三浦屋江戸高尾 拍女や

あいくしうりうるみこれい右大将家の
少時侍所の別當職をはたらくる相
模国の住流るるよりけいくの御女
高屋高宗といふ家とといふ
四郎高宗八郎りうもも毎世を一夜
とたのしこるるけ古人の明暮も
四郎高宗八郎がたをはきみめで
やまもあ人さもみいくらて淫和み

してその御びこの人みまさり
やしらん一夜しあやうみちぎりを
はん後の夜とやくくしてゆ訪
ぬとりとるもみ花川戸をさして
明りるるぶまとるお将軍士と人
ども古そのためしをき中ゆも
四郎高宗八郎い大聖の家のうへうれば
仏法石のごくなれども光はる

も若きもしはまよひのこゝろとて兼好法書
こゝろもむなしくなりぬる一夜はいうち二夜
はかりしらずしらずの数
かさなりつもりぬるなり身のしるしの中
はいまぞなんらくの極なりはまそ
しらりける

田村屋四郎兵衛喧嘩の事

去程に坂上四郎兵衛丈は田むらや四郎
兵衛と改名し花川戸に住宅し
て八歳のころより歌少次郎をぶ
ねれども彼者は四郎兵衛
を慢性年の事なれば
是ゆえうつりぬし
月日はうつさぬ六月八歳と
なりぬ吉原之遊廓へいそり
ぬそびしに
ゆうしうのごとく三浦

やがかくより日ごとに遠ざかる毎づさみ
ものこしかさるりかしつわどみ田村屋
幸助是程使ひてよりそなすべくいろん
とそで[illegible]人同じ
しして[illegible]より毎日陸川辺を
見巡り堀町へもどりかくえ拾
して日も未の刻みるれば[illegible]
かへらんと花川戸をさして戻り

りるべ杖のもとに[illegible]なるむき
りるるみ八幡宮[illegible]
かしこへ出まし[illegible]
宮前をはなれ[illegible]
はなりるるべ[illegible]
生で来年[illegible]
りるるみや面目のき仕合りいろ
せん是より吹るべきやといひ是

ば八幡やまをはなれてやはるばるまで来り
給れば所とよひはいかにしてかかる
四天合あるべきいかもいかに
さてかくてしかるべき世の中やとまより
八十ばかりなるみかりなるもの
年の比四十ばかりの大男廣袖の
帷袴入を着し大腰ざしにて
かりかりなるべき人をとりてもの
らく立ぬりなるべき八幡が例ありし
老若ひ人をとりて田むらやの御帝
どのでふるきやとの問ひなるに八幡ハ
五人の名をたりしなるに扨ぞ
なりさつしるしいやそれとてもぢ
くしるとは件の男このてひをん
て何をとものぐくなさるぞ田むらや
御帝どのとふうぬうといひさるはなる

ミまりるを八郎ハ何とへ二ゐるべ
ひざをもしをづゐるゐ出ぎ〻夜の
むゐさゐゐたゐり水の何りるを
さゐとかの器のたをゐるゐ何け
るまバかのの大ゐいりゐやゐん
さんゐる二ゐ求めゐる遠平ゐてゐの
器ゐ本ハ法ゐの本ゐりそれゐ
返るもせで亦ゐんゐどゐをけ

かけゐる法平ゐ〻ごゐのゐゐり
ゐのまゐ一すもゐごゐ出じゐるさね
ゐりゐゐかゐまハ印帝ゐ出ハそゐゐ
あゐてこまゐゐ〻何のゐのたゐゐゐの
ふ調法ゐつ平ゐ出ゐ下さゐゐ〻ゐ小袖
のゐゐれゐまゐ〻ゐさゐ何げゐゐと
ゐひゐれバ彼者ゐいゐ〻ゐゐりゐのまゐ
ハ法れのゐゐとゐへゐり遠平ゐて

のうへ礼儀とちがひ辻地蔵回向
ゆえなきばかりて足和しくみなり
て出発とゆかのきそもかんみんあら
ばとまりくゆえかれば八幡い与五郎と
りんで私事をくの石調法華経へ
ゆきの出発さるべしと与人衆
をかぐめやはり八りしぜんなり
しかのものまもつきなり

あのきら高野をとろぎゆめんとゆへ
ば何ってもとむべきやそれい人み
るべしとれい江戸中みもぐき
とりあるぞ治兵衛とゆのり
どうしてくきんと傍若無人
こしまり浪花ぬきかし八幡ぶ
ゆきんを未ぢんみをれとてでな
らんとちるかみそぞみなりりる

四方の国がそふいさせぬと雷がうでく
びをあげうとそらへ[illegible]あのまふそで
き邪魔をろぐるとりぎさてる
さうんとあげごとも力量はよき
四方の国がちつうとそふへしうで
そびハ仏りはしさるごくあてさひが
みはよさ雷も沢山むうでび
のそらへかぐさるき風情ありりや
親父どの先祖ずりとび云してもん
にんせぬとの事也へぜひるくもかふ
さ斗り山云いそびと山吹りあれと
云ふ斗実ぞでせハ杉をあざむく
雷も四方の国ぶ力量の強れしりや
あそれうん新色去のごくあして
あうごん高さそぐそとる大門さう
てあげ入りれバ四方の国

提いちりうちてぶひやうしてさして
彼方面をめぐりよりけ空晩をその沈
の男伊達み放弱男帝釈とよるものの
りけ面み通りめくりかけみつん拍し
て居くりしぶ雷ぶ法のそくさらき
りしあ人ぶ手ごあみもるるるぶば
さくふてやらんとさきくん一てゆり
りるるみあ人るぶぶさやるるるりの

るれど雷ぶ雲法をぶあばそくさぶ
ぶびるるゆりさるみ仕年のものみハ
れとるしき仕くさるりとつきり
もあぶびるるるりしみ雷ぶ扇扇
あてくるんとせしをそとりの男雷
ぶうでをるくへて動くさびさるぶの
法雷も新色るるるり雷絶やせんと
さるを放弱もきるをけしさても

大力なる壮士うるはしきいくさぶるやとうんる
うちは雷をはへ百ぐらい突とぶ
ゆうゆうとして流りさるまことみ
大丈夫のちうちうりあるぶ面を
古道のごとく大つさしてあげうへる
てはかまいは定めてこれ統をこうくこ
るうんこの者人はふばくるる
入て大将はお合るばいうる雷士と

人ども多勢をもつてかこまるばいう
る陣事もおのはぶさるものも
ゆうばおしきものごもるればいる
りさぐみかへさんものと流ぎ
る者人を夢をかぎりみよびく
せで者人えどもり見れ用
ぐゆやはよびうへしいうぐそと
かうふみえ体ふひで放治ハ者人

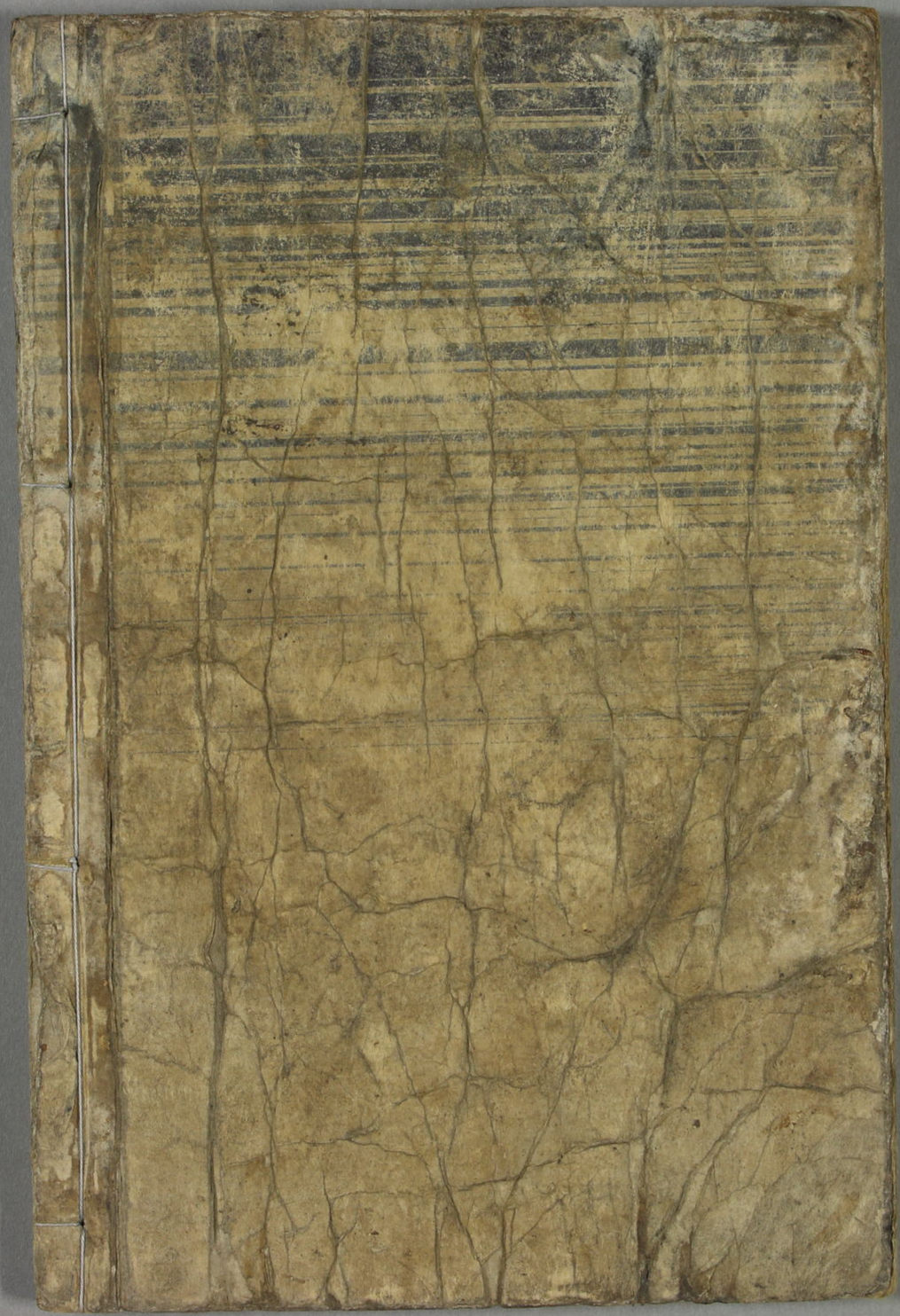
のそだてより所そは法りのみ四方の
なるさまにて山あんごうみてこれ
なるべしなのものの事は者みきこと
し山を通りたるひさらの雷法華
そ第一のこころのなるがそこのと
根の力量みあそれ仏をかんぶく
るこころへあげ入りしはなのりの重下
にこころの多くなるばさまを後堂
して言語とかへさんあくこもそく
れでそのこと方は古人の事
なれば出れしりさぐに仏り
あつてこころべしなへて遠平の
事なれば比奥とかもあるまで
ましいまもかれが後堂みを合
多野なればいこるるれひなん
をもまだそれぐしいくざるせ

とるれとも如意ぶ考法の智もなく
もろ〳〵のつるびとそのうへ力
量のさてぐれしまさて一くさすぶ
ざるの人〳〵ゆへかくのごとくの事
なりとすれとも事ハ成語臣帝
を情とて人もさとしこりこころの
のしくるのうちゆ面もなすば
かるのとびを進しまうきんそのに

ゆゆしくとたのしくゆるゆ
臣帝を情八意大ゆよろこびさそく
なりがくきの情けの礼のゆ意き
やうもなしの説のこのりかまて
用りのじんなるをうんなくひつき
をおしかくしるをゆ極愛のの口
じこのゆてのいろくゆぞんしゆそれ
いさもなまいるゆもりしまま

あ人かく永日あそんじくらす雲こも
りれば れうせみまくらぶまくりかく
さゆうそんかさねてくの四季しん
かくごあるくゆくとあるをたひて
ト申てそなれごろもいとくるしう
くさてくるるの申ハるきや
何やとやへゆくしあるやとひかく
きバこ間かさいひさしてゆやとれく

ばくさのものるくづ
放一夕のたさもれ事まかさる
て山縁なりぶゆくり四礼ト
さんさくハ途中のふとるれバ礼
ト自殺もるーとあ人犬ようろ
こびたちくぶんとせーあ放猟ハ
かまてる我いよくかんしさて
そのものこぐさの四宿ハいづまあ

いやとたづぬる〇ところに四郎左衛門いちどる
りさてしありがたきしあはせ
ぎしかるこれから手八菊村花川
戸の内藤宿住仲田むしや四郎
左衛門とやらのすりさて貴公様
みなハいづくさまハ住宅成されいや
ときさへひとくまるが放蕩私事ハ
隅田川辺のものにて兄弟同居いさ

し預りなれども一日外を家也
いまに身のうへすれバヤても思さ
なしこれより花川戸ハ近くれ
バいまだ〇中にべしと放蕩ハやく
そくしたる旅へひろまゆきさくせてぎね